

複合動詞の歴史的変化

青木博史（九州大学／国立国語研究所）

1. はじめに

歴史的観点から複合動詞を記述しようとするとき、対立する2つの見方が存する。

(1) a. 古代語には複合動詞は存在しなかった

(吉沢 1952, 金田一 1953, 百留 2001・2002・2003 他)

b. 上代からすでに複合動詞は存在した

(井上 1962, 徳本 2009, 阿部 2011 他)

(1a) では「動詞連用形+動詞」の形は古代では2語の連続であり、歴史的推移を経て「複合動詞」というカテゴリーが成立した、という見方が示される。一方の(1b)では、意味的・統語的観点から、「複合」したと見るべき例が古代語にもあることが示される。

(2) a. たまはやす武庫の渡りに天伝ふ日の暮れ行けば〔日能久礼由気婆〕家をしそ思ふ

(万葉集・巻17・3895：井上 1962)

b. よろづのものもめぐみもえはじめて〔万物毛萌毛延始天〕

(続日本紀・宣命・神護景雲3年11月28日詔：徳本 2009)

c. 大君の任きのまにまに取り持ちて〔等里毛知氏〕仕ふる国の年の内の事かたね持ち

(万葉集・巻18・4116：阿部 2011)

現代語の複合動詞を「複合動詞」と呼ぶかぎり、(2)に挙げられる諸例は「複合動詞」と見るべきものといえる。また、古代語において高度に発達している敬語システムも、「複合動詞」によるものといえるだろう。

(3) a. やすみしし我が大君の夕されば見したまふらし〔召賜良之〕明け来れば問ひたまふらし〔問賜良志〕

(万葉集・巻2・159)

b. 天飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをして〔意久利摩遠志氏〕飛び帰るもの

(万葉集・巻5・876)

しかし、(1a)が唱えられる根拠も認められるべきである。すなわち、①アクセント、②連濁、③助詞の介入、④前項・後項の入れ替え、といった点である。特に③は重要で、2つの動詞連続の間に助詞が入るのであれば、現代語の「複合動詞」とは異なるものである。影山(1993)では

「語」の定義として「形態的緊密性」を挙げるが、助詞の介入は明らかにこれに反する。

- (4) a. 慰もる心はなしにかくのみし恋ひや渡らむ〔恋也度〕月に日に異に
(万葉集・巻11・2596：吉沢 1952)
- b. 宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩が本を思ひこそやれ (源氏物語・桐壺)
- c. かく心ときめきし給へるを見も入れ給はねば、御返りなし
(源氏物語・真木柱：関 1977)

①は、アクセントが差された目的が定かでないので(関 1977 など)、根拠としてはやや弱い。しかし、近年の方言研究からの提言に鑑みると(新田 2010)、複合語アクセントを有していなかった蓋然性は高いように思う。④の事実も併せて考えると、古代語の複合動詞の存在を認めるにしても、現代語と比べると「前項と後項の結合度が緩かった」ことは揺るがないだろう。

- (5) a. なほ人のあがめかしづき給へらむに助けられてこそ (源氏物語・夕霧)
- b. この宮を父御門のかしづきあがめ奉り給ひし御心おきてなど (源氏物語・若菜上)
- c. 昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの
(源氏物語・若菜上：関 1977)

意味の面から、2つの動詞連続と見るべき例をもう少し挙げておく。

- (6) a. 漕ぎ廻むる浦のことごと行き隠る〔往隠〕島の崎々隈も置かず思ひそ我が来る
(万葉集・巻6・942)
- b. 泣く泣く「夜いたうふけぬれば、こよひ過ぐさず御返奏せむ」と急ぎまいる
(源氏物語・桐壺)
- c. いまはむかし、あづまうどの歌いみじうこのみよみけるが (古本説話集・上)

こうして見てくると、(1a)と(1b)はまったく対立するものではなく、見方次第でどちらも成り立つものであるといえる。すなわち、「複合動詞」の定義をあくまで現代語に置かならば、古代語のそれが現代語と異なるのは明らかなので、複合動詞というカテゴリーは存在しないということになる。一方、(2)(3)のように複合動詞と見るべき例も存するのであるから、そのような観点からは「複合動詞が存在しない」という説自体、無意味なものとなる。

2. 古代語における「語」の構造

(1b)のように「一行く」「一來」という補助動詞の存在、あるいは「とりー」という接頭語の存在を指摘したとしても、あるいは関(1977)のように「真の複合動詞」の存在を指摘したとし

ても、(1a) を完全に否定することはできない。逆に、この語は複合動詞であるが、この語は複合動詞でないという議論は、現代語との相違を際立たせることにもなってしまう。

この問題を発展的に解決するにあたって重要なのは、他の文法現象も視野に入れて見ることである。前節で「形態的緊密性」の指標として挙げた助詞の介入であるが、古典語では係助詞が述語内に生起することはよく知られている。

- (7) a. 緑なるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける (古今集・245)
b. 梅の花にほふ春べはくらぶ山闇にこゆれどしるくぞありける (古今集・39)
c. 逢坂の関に流るる岩清水いはで心に思ひこそすれ (古今集・537)

「なりけり」「しるかりけり」「思ふ」といった述語に係助詞が介入し、「にぞありける」「しるくぞありける」「思ひこそすれ」といった形式を構成している。「なり」を「に+あり」のように分割したうえで、その間に助詞が介在することが可能なのであるから、「恋ひ渡る」のような「恋ひ+渡る」という構造の間に係助詞が生起することは、容易に行われたものと考えられる。

「形態的緊密性」に関しては、複合語における外部からの修飾という観点も挙げておく。(8) は V+N 部をもつ形容動詞、(9) は動詞重複、それぞれにおける「句の包摂」の例である。古代語ではこうした構造が許されたものと考えられる (→青木 2010)。

- (8) a. 庭の草、[氷にゆるされ] がほなり。 (蜻蛉日記・下)
b. 御前いとあまた、ことごとしうもてないて渡い給さま、いみじう [心に入り] げなり。
(浜松中納言物語・巻3)
- (9) a. されど、[目にみす] みすあさましきものは人の心なりければ (紫式部日記)
b. みな [狩衣の袖をしぼり] しぼりまいる氣色さへ、あはれをそへたり (増鏡・下)

以上のような現象をふまえると、古代語に複合動詞はなかったと主張するよりも、ひとまず古代語にも複合動詞は存在した、ただし、その構造は現代語とは異なっていた、と見た方が建設的であると思う。そのうえで、現代語と古代語はどこがどう違うのか、そして古代語から現代語に至るまでにどのような歴史変化があったのか、ということを考えていきたい。

3. 動詞の重複

本発表では、まず前節でも触れた、動詞重複形に注目したい。いわゆる補助動詞（前項主要部タイプ：青木 2012, 影山 2012）が表す意味として特徴的なのは、動作の進行・継続、強度などを表すものであるが、動詞重複はこうした意味を表す原初的な語形成である（青木 2010）。

- (10) a. 春雨の止まず降る降る〔不止零々〕我が恋ふる人の目すらを相見せなくに
(万葉集・巻10・1932)
- b. つぼねぐちには几帳を立てつゝ、験者あづかり／＼のゝしりゐたり (紫式部日記)
- c. 北の方いそぎにいそぎ給ふ (落窪物語・巻1)

(10a) のような終止形重複は次第に副詞化し、語彙化したもの以外用いられなくなるが、(10b) のような連用形重複は現代に至るまで用いられている。

ここで重要なのは、連用形重複は「句」を含む構造として、古代から現代まで変わらず用いられているという点である。

- (11) a. 刀にしたがひて血のつぶ／＼といできけるをのごひ／＼おろしければ
(宇治拾遺物語・巻4-7)
- b. そこで二人は元気を出して上着の袖で汗をふきふきかけて行った
(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)

これは、補助動詞を用いた複合動詞の構造と等しいといえる（「ニュースを聞き漏らす」「空が晴れ渡る」「虎がおりから逃げ出す」）。

また、重複形が副詞として語彙化した場合は連濁を起こすが（終止形「つくづく」「かはるがはる」「かへすがへす」、連用形「ちりぢり」「とりどり」「かねがね」）、(11) のように副詞句として機能する際には連濁しない。「使ひびと（人）」「もてなやみぐさ」のように、「動詞連用形＋名詞」という「複合名詞」を形成する際には連濁することを考え合わせると、連濁しない「動詞連用形＋動詞」という「複合動詞」は、「動詞連用形＋動詞連用形」という「重複」とやはり同じ構造をしているといえる。すなわち、「動詞重複」や「複合動詞」における前項の動詞連用形は、いわゆる語構成要素ではないと考えられる。

4. 接頭語化

関（1977：120-126）では、「おしー」「かきー」「さしー」「とりー」「ひきー」などが接頭語化する様相について、中古における「当時の複合動詞全般の構成要素間の意味関係の基調」が、「上位の動詞に重きがおかれる」関係にあったため、「接頭語化する傾向が強く阻止されていた」、時代が下り、そうした意味関係が変容するにつれ、接頭語化が増大したと説かれている。しかし、この歴史変化については、上代から中古にかけて始まっていることに注目すべきであろう。

- (12) a. やがて馬引き過ぎておもむきぬべくおぼす (源氏物語・明石)
- b. 上達部なども、道をよぎつつ引き過ぎて、向ひの大殿につどひ給ふを (源氏・賢木)

近代語以降、こうした接頭語化は起こりにくい。文法的要素への変化としては、複合動詞の場合は補助動詞化、すなわち後部要素の抽象化という形で古今を問わず観察されるが（→次節）、これは主要部における変化ということで了解されるものと思う。しかし、後部だけでなく前部も文法的要素として切り出せるということは、それだけ前項と後項の結びつきが緩いことを示すものと考えられる。すなわち、古代語における「動詞連用形+動詞」の形は、意味的に一まとまりになってはいるが、現代語と同じ「語」としての緊密性を有してはいないと考えられよう。

5. 複合動詞の歴史的变化

以上のように、従来指摘されてきた、アクセント・連濁・助詞の介入に加え、重複句との並行性、接頭語化といった事象を併せ見ると、古代語は現代語に比べ「語」としての性格が薄い、言いかえると「句」としての性格を多分に有しているといえるように思う。したがって、複合動詞の歴史的变化は、「句」的な動詞連続としての「複合」から、「語」的なまとまりを示す「複合」への変化であると見ることができそうである。

5-1. 補助動詞

上のよういいうとき、後部要素の補助動詞が発達することで生産的に「複合動詞」が作られるようになった、という変化が期待されるが、「補助動詞的なもの」は上代から存しており、その内実はさほど変わっていない。徳本（2009）に挙げられる例は、以下のとおりである。

(13) 不可能：あふ、得、かつ、かぬ、知る

時間：初む、始む、渡る、続く、をり、ゐる、います、終ふ、はつ、尽くす、来、行く、
継ぐ、返る、返す、ます、まさる

空間：渡る、渡す、通る、歩く

程度：飽く、余る、頻く、しきる、足る、たつ

相互：合ふ、かはす、かふ

意図：みる、おく

関（1977：110-113）に挙げられる、中古の源氏物語の「補助動詞的」「接尾語的」な例は、以下のとおりである。

(14) 完了・継続：果つ、わたる、居る、おはします、成る、及ぶ

移動：ありく、寄る、行く、来、参る、馴る、通ふ、入る、のがる、…

状態：合ふ、わぶ、騒ぐ、ののしる、すさぶ、たはぶる、困ず、…

現出：出づ

現代語のもの（統語的：始動，継続，完了，未遂，習慣，相互行為，可能など。語彙的（L-asp）：完了，開始，継続，習慣，強調，相互関係，不成立など →影山 2012）と比べても，表される意味概念はほとんど変わっておらず，語彙的な出入りがあるにすぎないといえる。

5-2. 連用形の機能

「未発達→発達」といった具体的な事実は観察されないとすると，目に見える変化として最も大きな部分は，(6) で挙げたような「動詞連続」を，「テ」などを明示して動詞連続として表すようになった点ではないかと考えられる（「急ぎ行く」→「急いで行く」，「惜しみ思ふ」→「惜しいと思う」）。古代語では，「語」に見える形式（動詞連用形+動詞）で表していたものを，近代語に入ると，「句」であることを明示する形式で表すようになったわけである。

これを逆に見れば，動詞連用形でできることが，古代語のほうが多かったということになる。継起的な動作（「行き隠る」），副詞的に修飾すべき動作（「急ぎ行く」）であっても，連用形で表すことができたわけである。このような連用形の修飾法における機能の広さが，結果的に多くの「動詞接続」を作り出し，複合動詞の「未発達」を印象付けることになったものと考えられる。

したがって，こうした「動詞連続」の有無が，古代語と近代語を見分ける1つの指標となりうる。今回の調査では，中世鎌倉期の宇治拾遺物語・平家物語には「惜しみ申す」「恐れ思ふ」「入り来る」「おり走る」「乞ひ寄せる」「売り使ふ」「走り添ふ」など多くの例が見られたが，室町期の中華若木詩抄・玉塵抄では，「廻りはたらく」「驚き見る」など数例しか見られなかった。次のような例は，上に述べたことを端的に示すものといえよう。

- (15) a. 横たへさされたりける刀をば紫宸殿の御後にして (覚一本平家物語・巻1)
 b. 横たえてさされたかの刀を紫宸殿の後で (天草版平家物語・p.6)

鎌倉期の平家物語で「動詞連用形+動詞」で表されていたものが，室町期の天草版平家物語では，「テ」を表示した明確な「句」の形で表すようになっている（他に「焼行く」→「焼いてゆく」）。

5-3. 「句」と「語」の区別

重複構文においては，中世室町期以降，「韻を踏み踏みする」のような形が許されなくなり，「韻を踏み韻を踏みする」のようにしなければならなくなるという変化が起こる。

- (16) a. 十日ヅゝ居テ又別ノ子ノ処へ行々(ユキ／＼)セウゾ (寛永版蒙求抄・巻10・39オ)
 b. ある人，かの者の日々に同じ所へ行行っては帰り行っては帰りするを見て
 (エソポのハブラス・p478)

「重複+スル」という複雑述語において，「語+スル」は不可で「句+スル」でなければならない

という規則が、次第に出来上がったものと見られる。(16a)のような「…又別の子の処へ行き行きする」は、現代語ではかなり違和感がある。「別の子の処へ行き別の子の処へ行きする」のように、「句」であることを明示しなければならなくなってきたものと考えられる。

2節で挙げた(8)のような「句の包摂」が見られるのも室町期ころまでである。形容動詞的なものは現代語にも見られるが(「ーがち」「ーぎみ」他)、次に挙げるような名詞句として機能するものは、室町期特有のものである(→青木 2010)。

- (17) a. 呉人ガ西施ヲクセ物ト云イゴトハ無益也 (中華若木詩抄・巻中・50ウ)
b. 人之物ヲ以テ我ニシテ客人ヲモテナシ事ハナインゾ (周易抄・巻5・7ウ)

このように、時代が下って「語」「句」という単位が明確になってきた、すなわち、「語」でやれることと「句」でやれることが、次第に定まってきたものと考えられる。そしてこれらは、いずれも室町期を境に変化が観察されるのである。

複合動詞における助詞の挿入についても、同様に考えられそうである。影山(2012)では、助詞の挿入が起こるのは、補助動詞(前項主要部)タイプに限られるのではないかと推定されている。しかし、古代語では後項主要部タイプのものもしばしば見られる。以下に、中世鎌倉期の例をいくつか掲げておく。

- (18) a. おやたちのうしろめたなき物にのたまひしかば、このめのと、うちもとけられず
(古本説話集・上)
b. アノ光物、行向ヒテ射モ殺シ、切モ殺シナンヤ、ト仰ケレハ畏テ承リ
(百二十句本平家物語・巻6)

関(1977: 93-94)にも、「追ひ払ふ」「聞き知る」「引き動かす」「立ち離る」「脱ぎ換ふ」「引き具す」「消え失す」などが挙げられている。

しかし、こうしたものが次第に補助動詞タイプに限定され、なおかつ「思いもよらず」「聞きも入れぬ」のような、打ち消しを伴った句に限定されるといった変化(イディオム化)が起こっていると考えられる。今回の調査では、中世鎌倉期の古本説話集・宇治拾遺物語・平家物語では(18)のような例が見つかったが、室町期の中華若木詩抄・玉塵抄では見つからなかった。

以上のように、複合語形成の歴史において、①V-N複合語における「句の包摂」の消滅、②「重複+スル」構文における「語」の排除、などが中世室町期を境に変化するのと同様、複合動詞においても、③接頭語化の収束、④「動詞接続」の排除(→テ形の発達)、⑤助詞挿入の固定化、といった現象がほぼ同時期に観察されることが分かった。そしてこれは、金田一(1953)における、近世初期の『補忘記』(1687)でアクセント変化が観察されるという指摘とも符合するのである。

6. おわりに

「いでく」という「動詞連用形+動詞」の形は、古代語では「出る+来る」という2つの事態を表した。しかし後代では、こうした2つの事態を表す際には、「テ」を伴った「出て来る」という「句」の形で表すようになった。そして「いでく(→できる)」という「語」の形は、「発生」や「完成」そして「可能」といった1つの事態的意味を表すものになった。複合動詞の歴史変化は、この語に代表されるように、語と句の交通整理が行われたことの反映、さらには動詞連用形の機能の整理が行われたことの反映であった。

動詞連続(=「句」)から複合動詞(=「語」)へ変化したと見ると、複合語の後部要素(主要部)の抽象化によって補助動詞が発達し、さらにそこから統語的複合動詞が発達したと考えたくなるのである。しかし、すでに見たように、補助動詞的なものは古代語の段階にも認められる。そして、「統語的複合動詞」とは「句」的な要素を含むものであるから、むしろ古代語的な動詞連続の構造をそのまま受け継いだものと見てよいのではないかと考えられる。

<参考文献>

- 青木博史(2010)『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房
- 青木博史(2012)「統語的複合動詞」再考」国立国語研究所共同プロジェクト「日本語文法の歴史的
研究」研究発表会(2012年3月4日, 国立国語研究所)発表資料
- 阿部裕(2011)「上代日本語の動詞接続「トリー」について—複合動詞の存否を中心に—」『Nagoya
Linguistics』5
- 井上展子(1962)「動詞の接辞化—萬葉の「行く」と「来」—」『萬葉』43
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(2012)「レキシコンと文法・意味:複合動詞研究のこれから」関西言語学会第37回大会シ
ンポジウム「日本語レキシコン研究の最前線」(甲南女子大学, 2012年6月2日)発表資料
- 金田一春彦(1953)「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』
三省堂
- 小島聡子(2001)「平安時代の複合動詞」『日本語学』20-9
- 山王丸有紀(2009)「上代複合動詞の結合事情についての一考察」『国語語彙史の研究 28』和泉書院
- 関一雄(1977)『国語複合動詞の研究』笠間書院
- 武部良明(1953)「複合動詞における補助動詞的要素について」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』
三省堂
- 徳本文(2009)「上代の複合動詞—前項と後項の意味関係から—」『立教大学日本文学』102
- 新田哲夫(2010)「石川県白峰方言の複合動詞アクセント」『日本語研究の12章』明治書院
- 百留康晴(2001)「動詞接続から複合動詞へ—「入る」の補助動詞化を中心に—」『文芸研究』152
- 百留康晴(2002)「複合動詞後項「—出す」における意味の歴史的変遷」『文化』66-1・2
- 百留康晴(2003)「中古動詞表現における動詞接続の展開」『国語学研究』42
- 吉沢典男(1952)「複合動詞について」『日本文学論究』10